



最後の一枚の葉 (26)

ベーアマンは芸術的には失敗者でした。四十年間、絵筆をふるってききましたが、芸術の女神の衣のすそに触れることすらできませんでした。傑作をものするんだといつも言っていました。いまだかつて手をつけたことすらありません。ここ数年間は、ときおり商売や広告に使うへたな絵以外にはまったく何も描いていませんでした。





最後の一枚の葉 (27)

ときどき、プロのモデルを雇うことのできないコロニーの若い画家のためにモデルになり、わずかばかりの稼ぎを得ていたのです。ジンをがぶがぶのみ、これから描く傑作について今でも語るのでした。ジンを飲んでいないときは、ベーアマンは気むずかしい小柄な老人で、誰であれ、軟弱な奴に対してはひどくあざ笑い、自分のことを、



最後の一枚の葉 (28)

階上に住む若き二人の画家を守る特別なマスチフ種の番犬だと思っておりました。

ベーアマンはジンのジュニパーベリーの香りをぶんぶんさせて、階下の薄暗い部屋におりました。片隅には何も描かれていないキャンバスが画架に乗っており、二十五年もの間、傑作の最初の一筆が下ろされるのを待っていました。



最後の一枚の葉 (29)

スーはジョンジーの幻想をベーアマンに話しました。この世に対するジョンジーの関心がさらに弱くなったら、彼女自身が一枚の木の葉のように弱くもろく、はらはらと散ってしまうのではないか…。スーはそんな恐れもベーアマンに話しました。

ベーアマン老人は、赤い目をうるませつつ、そんなばかばかしい



最後の一枚の葉 (30)

想像に、軽蔑と嘲笑の大声を上げたのです。

「なんたら！」とベーアマンは叫びました。「いったいぜんたい、葉っぱが、けしからん つたから散るから死ぬなんたら、ばかなこと考えている人がいるのか。

つづく

